

氏名	山本 将之		
学位の種類	博士（芸術学）		
学位記番号	博甲第	8739	号
学位授与年月	平成	30年	3月 23日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当		
審査研究科	人間総合科学研究科		
学位論文題目	清水多嘉示の塑造表現 —具象彫刻における構築性の追求—		
主査	筑波大学教授	博士(芸術学)	守屋 正彦
副査	筑波大学教授		柴田 良貴
副査	筑波大学准教授	博士(芸術学)	大原 央聡
副査	東京福祉大学准教授	博士(芸術学)	宮坂 慎司

論文の内容の要旨

山本将之氏の博士学位論文は、彫刻家 清水多嘉示（1897-1981）の人体塑造表現に見られる造形的な特質について考察し、具象彫刻における構築性について検討したものである。その要旨は以下の通りである。

（目的）

本研究は、清水多嘉示の人体塑造表現に見られる造形的な特質について考察し、併せて、著者の制作実践に基づく現実的な視座からの像容の解釈によって、具象彫刻、特に人体塑造における「構築性」という概念を具体的に取り上げ、考察することを目的としている。

（対象と方法）

清水多嘉示の塑造表現、及び、人体具象彫刻における「構築性」という概念の内実を探るため、本研究では、まず清水の生涯を概観するとともに、併せて彼に影響を与えたアントワーヌ・ブールデル（Antoine Bourdelle 1861-1929 フランス）の造形観を文献から考えている。次いで「構築性」という言葉の意味を、ブールデルや清水、オーギュスト・ロダン（Auguste Rodin 1840-1917 フランス）の言葉を基に考察し、さらに、清水の造形観を紐解くために、彼の著書や雑誌のインタビュー記事から言葉を抽出し、その内容について制作者の視点から解釈している。加えて、より詳細な清水の造形観を浮き彫りにするため、清水の弟子である神戸峰男（1944-）への聞き取り調査を行い、清水や神戸の言葉をふまえつつ、八ヶ岳美術館所蔵の清水多嘉示作品の実見調査を通して、その彫刻に見られる造形観を探求している。最後に、「構築性」の表出を主眼に据えた著者の制作実践を基に、彫刻における「構築性」について考察している。

(結果)

本研究では、清水多嘉示の塑造表現が記念碑的な作例と、そうでない彫刻（一般的な出品作）とに大別されることを指摘し、特に、一般的な作品は、初期「自然に準じた写実」、渡仏期「軸の統合並びに面の強調」、帰国後「軸の統合と張りのある量塊」と大きく三分割できるとしている。また記念碑的な作品には形態の単純化や軸の統合が強調されている点に造形的な特質を有すると考察している。

また、「構築性」という概念の具体的な内容については、清水の言を引用し「人体構造を根底に据えた必然のデフォルメによる新たな自然の追求」であるとしている。清水が造形を行う上で、線の統合による形態の抽象化を図り、物体存在に不可欠な直線性を強めたと著者は判断し、一方で、その背景について著者自身が具体的に塑形することで示し、人体各部の中心軸上から量を動かすことに主眼を据えた作品を複数体制作して制作研究を進めている。著者は清水の造形原理を自身の制作において再現することを試みた結果、人体の構造を根底に据えた造形を基礎としながらも、肉付けにおいて異なる造形へと派生していくという解釈に至っている。つまり、著者は具象彫刻における「構築性」が、広義には人体構造を前提としながら、狭義には「量」の操作という、肉付けにおける多様な解釈を含むことを指摘している。特に清水の彫刻に見られる「量」の操作が、上記のように線の統合による形態の抽象化を含むと論じている。

(考察)

第1章では、清水の生涯を概観し、清水に彫刻を教示したブールデルの言葉を咀嚼して、制作者の視点から、彫刻における構造に関する、ブールデルの造形観について考察している。第2章では、「構築」という言葉の意味を求めて、ブールデル及び、彼の前時代的な役割を担ったロダン、そしてブールデルに師事した清水の言葉を基に考察し、この結果、構築という言葉が建築や構成という言葉から派生したのではないかと著者は推論している。第3章では、清水の造形観が表れている言葉を、彼の著書や、雑誌のインタビュー記事から抽出し、その言葉の意味を制作者の視点から考察している。特に難解な造形言語である「第四延長」や「線」、「香り」等の言葉を清水独自の造形言語について論じている。第4章では清水の弟子であり、清水の造形観を踏襲する神戸峰男の聞き取り調査を行い、その会話を記録し、吟味をすることによって、清水の造形観を紐解く手掛かりを探求している。この結果、清水はロダンのような感情的・詩情的な造形とは異なり、自然の摂理に倣った構造に準じた純粋な造形性のみを追求した彫刻家と評価しうると著者は推論している。第5章では清水の作品を時代ごとに抽出し、その具体的な造形性を浮き彫りにするべく、制作者としての視点から、作品分析を行い、清水多嘉示の塑造表現の特質と、その造形概念の具体的な在り方について考察している。第6章では、著者の制作研究によって得られた造形上の知見を具体的に示すことによって、人体塑造における構築性について考察し、清水作品の造形概念について明快な解釈を行っている。

審査の結果の要旨

(批評)

清水多嘉示はブールデルに師事し、「ブールデルの芸術の真髄を日本に紹介した」とされる。また、清水は日本彫刻界の発展に寄与した人物として高い評価を得、晩年には文化功労者として社会的な評価を得ている。

清水については、これまで武蔵野美術大学を中心として体系的な考察が行われてきた。こうした先行研究を参照しつつ、著者は、清水と同じく人体を主題とする制作者としての視点から、清水の人体塑造表現に見られる造形的な特質について考察し、アーカイブ研究として彼の記録を集成している。

著者は清水の造形観を踏襲する神戸峰男からの聞き取り調査を行い、文献だけでは知り得なかつ

た清水彫刻の具体的な造形性を明示している点に独自性を有すると考える。また、併せて清水独自の造形言語を制作者の視点から丁寧に読み解いている点も評価することができる。

さらに、著者は具象彫刻における「構築性」という概念について、実践的な制作研究を基に現実的な視座から考察を試みている。彫刻批評において、「構築性」という言葉は容易に用いられる傾向にあるが、実際の制作においてその内実を表わすことは極めて困難である。本研究で、著者は、量塊同士の位置関係を厳密に決定するために幾度となく破壊と再構築を繰り返す必要があると判断し、「構築性」という言葉の裏には制作者の現実的な感覚が示されていると結論付けている。著者が独自の視点から導き出し、理論と実践によって、清水多嘉示研究を進めた点は、制作系の学位論文として従来にない視点であり、本論文を通して行った「構築性」に関する考察についても高く評価することができる。

平成 30 年 1 月 16 日、学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと論文について説明を求め、関連事項について質疑応答を行い、最終試験を行った。その結果、審査委員全員が合格と判定した。

よって、著者は博士（芸術学）の学位を受けるのに十分な資格を有するものと認める。